

中学校社会科歴史的分野

研究授業「江戸時代の農民の生活」・教材と学力形成

—— 「関心・意欲・態度」の評価を視野に入れて ——

倉橋 忠

はじめに

本研究の実践舞台となった中学校は、当時、低学力の生徒が多く、「学習意欲」も低く、「授業態度」を教師によって極端に変化させる傾向にあった。そのような状況下で、生徒たちに学ぶ楽しさを体験させる授業を設計・実践する必要性に筆者は駆られていた。これは、その一端を報告する研究である。

さて、一般に、中学校2～3年生の授業では、「力」のない授業は、授業妨害に遭う場合も珍しくない。そのような状況下で、「関心・意欲・態度」を「授業態度」に置き換え、「通知簿」の評価に入れることで、授業を維持しようとする傾向すら一部にみられる¹⁾。

一方、今日の研究実践は、授業の「入口」²⁾での「興味・関心」を引き出すことに力点を置いたものが多い。しかし、評価対象としての「関心・意欲・態度」は、授業によって形成された学力でなければならないはずである³⁾。

I 生徒指導要録の4つの観点と学力

最近、にわかに「新学力観」、わけでも「関心・意欲・態度」をどう理解し、どう授業実践するかで、教育現場の議論は分かれている⁴⁾。

情意的な領域の問題であると考えられてきた「関心・意欲・態度」を学力としてとらえることが可能なのか。学力は測定可能なものであるという立場に立つとしても、測定装置がなければ学力ではない、というような議論は成り立たないはずである。むしろ検討されるべき1つの課題は、学力をどのような装置で測定・評価するかであろう。

筆者は「関心・意欲・態度」を学力の一態様である⁵⁾と理解し、次のように仮定し授業実践している。

社会科の評価でいう「関心・意欲・態度」は、社会科の学習を通じて形成した基本性の学力(「知識

1) 竹田清夫は、前回の生徒指導要録の「関心・態度」項目を、現場の教師が何で評価しているか調査して、「学習態度」を「関心・態度」として評価していたと報告している。竹田清夫「指導要録における『関心・態度』評価の実態」『教育方法学研究』第17巻 1991年82頁。この傾向は、今日の生徒指導要録の「関心・意欲・態度」の評価でも持続しているものと考えられる。

2) 授業の「入口」と「出口」という命名は、田中耕治による。

田中耕治「関心・意欲・態度問題にこたえる ―学力評価からの提案―」『わが子は中学生』あゆみ出版1994年6月号10頁。

3) 北尾倫彦も「関心・意欲・態度」を教育目標であると前提し、結果としての「関心・意欲・態度」を評価すべきだとする。

北尾倫彦「観点別評価の考え方と手順」北尾倫彦・祇園全禄編『中学校社会観点別学習状況の評価基準表』図書文化1994年32頁。

一方、木下康彦は、「関心・意欲・態度」は導入部分だけではなく、指導過程全域において重要であり、評価対象は「学習結果」ではなく「学習状況」とであるとする。木下康彦「観点別学習状況の評価のあり方とデータの集め方」石田恒好・木下康彦編『中学校社会こうすればできる観点別評価の手順』図書文化1994年28頁。

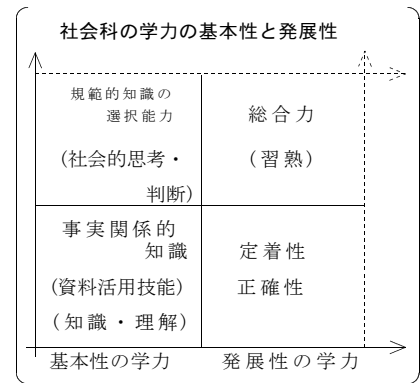
4) 特に中学校社会科の場合、「社会的事象への関心・意欲・態度」を「社会科の授業への関心・意欲・態度」に読み変えてしまっている実践されている場合が多い。

5) 田中耕治によれば、認知領域と共に情意領域も、基本性と発展性がある学力である。

田中耕治「学力モデル再考」兵庫教育大学教育方法講座『授業の探究第4号』1993年19頁。

・理解」「資料活用技能」⁶⁾や「思考・判断」⁷⁾をもとにして、形成される発展性の学力(総合力)である⁸⁾(図①)。

「関心」は、社会事象を社会的に課題対象として捉えようとする意識の傾向である。たとえば、商店街の花屋の花について考えてみると「花屋の花」をより具体的に社会科学的な研究対象としてとらえ、「花という商品の価格の決定要因」などを考えたり、「花屋という商売の歴史」を調査したりする意識の傾向が「関心」であると理解する⁹⁾。これは、その他の領域の学問(教科)と関連しながらも、視点を変えて全く異なる課題対象としてアプローチする、社会科を



(図①)

学ぶことによって培われる学力である。

また、「社会的事象に関する意欲」は、前述したような社会科的なとらえかたをしようとする「意欲」であり、「花屋」という「事実」を社会的事象として理解しとらえようとする意識の強さと方向であるといえる。「意欲」は、自発的に社会科的な方法で課題追究しようとしたり、学習内容を深めようとする意識の傾向であり、具体的には、すすんで学習上の疑問点を調査したり、ノートにまとめるような行動に現れたときに学力としての内容をもつと考える¹⁰⁾。

一方、「態度」は「授業態度」ではない。社会的事象の多くは、学ぶ者に何らかの意志決定あるいは価値判断を要求する。その意志決定や価値判断で、客観的・合理的に、かつ公正な過程を経て導き出すことの能否が重要な内容である¹¹⁾。その内容の部分々々は、価値判断基準を選択し、その基準に即して、客観的・合理的に判断することのできる能力、すなわち「社会的思考・判断」という学力である。その「社会的思考・判断」を重ねて導き出された「結論」が、「社会的事象に対する態度」である。しかし、この「結論」部分は、いわゆる「個性」のレベルのものであり、評価対象にはなじまない。かくして、筆者は評価対象を「社会科的な態度」に絞る。すなわち、社会科の評価でいう「態度」とは、態度決定を迫られる場面で、結論(態度)を導き出すまでの方略に、客観的な事実を指摘し、社会科のテクニカ

6) 「知識・理解」と「資料活用技能」が基本的な学力であることについては、大方の意見である。たとえば、倉持重男「中学校社会科の学力と授業」歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報1993年版』三省堂1993年147頁。

7) 倉持重男は、社会的思考・判断を発展的な学力であるとしているが、「興味・関心・意欲」を「学力を支える大事な要因、または目標と考えるべきではないか」としている。前掲 倉持「中学校社会科の学力と授業」146頁。しかし、倉持の学力観は目標と分離されていて、目標の位置づけが不明確になる点で賛同できない。

8) 中内敏夫は、「態度」概念の不明瞭さを指摘し、「習熟」を用いるべきだとする。また、中内は早くから「習熟」の評価に関する実践・研究の必要性を提起している。中内敏夫『増補学力と評価の理論』国土社1976年188頁。

9) 理科的には、花の品種や花や茎や葉の構造や花の成長などが課題の対象となるであろう。また、美術的には、色彩や形が描く対象であり、国語的には「きれい。うつくしい。かわいい」などと言語で人の感情を表現する対象となり、それぞれの学問的な領域からアプローチ(接近・観察・表現)する角度は変化する。

10) 筆者の「ノートの評価基準(5段階)」は、次の通りである。

- A ノートに工夫(内容がわかりやすいように、構造化されている等)が見られ、自分で調べたことなどが整理されている。
- B 工夫してノートをまとめているが、自分で調べたことが部分的にしか整理されていない。
- C 板書を中心にまとめているが、自分で調べたことが整理されていない。
- D 内容的(板書など)に欠落があるか、指示された学習(テスト直しなど)をしていない。かつ、自分で調べたことが整理されていない。
- E 内容的(板書など)にかなりの欠落と、構造的な混乱があり、指示された学習がされていない。かつ、自分で調べたことが整理されていない。

11) 岩田一彦『地理教科書を活用したわかる授業の創造』明治図書1984年21頁。

ルタームを適切に利用しつつ「社会的思考・判断」をとろうとする意識の傾向である。それは、社会科学学習を通じて形成される「表現力」に着目することで、客観化された測定・評価の対象とすることが可能となろう。具体的には、総括的評価として、定期考査等で作文を書かせる方法が考えられる。作文には、「関心」や、総合的な理解力及び思考・判断力や、応用力の到達点としての「表現力」が現れやすいからである。

以下に、筆者の授業「江戸時代の農民の生活」¹²⁾を題材として、教材と学力形成の関係を実践的に考察する。

Ⅱ 小単元の教育目標と教材の選択

(1) 小単元の教育目標

資料活用の技能を高めながら、江戸幕府の農民支配の基本方針と、江戸時代の農民の生活に関連づけて理解し、幕藩体制の確立とその動揺の背景を理解するための基本的な思考や判断の練習をする。あわせて、現在の日常生活を、歴史的に観察する関心や態度を培う。

(2) 到達目標（「知識・理解」における）

幕藩体制は、農民の納める年貢・米を根幹として成立していた。そのために、幕府は朱子学による倫理を強制し、徹底した農民に対する収奪を行った。

生産力の低かった当時の農村は、厳しい年貢の取り立てによって、ひとたび不作となれば餓死者を出した。農民たちは、その困苦から逃れるために、増収を願って新田開発に挑んだが、それにも限界があった。

その一方で、農民たちは、施肥による反当りの収穫量を増加させる集約的農業を展開した。元来、わが国の農業は稲作を中心にしていたために、連作による地力の低下を避けられず、古くから施肥は農民にとって大きな問題であった¹³⁾。さらに江戸時代では、二毛作あるいは輪作が普及し、地力の低下は避けることのできない重要な問題であった¹⁴⁾。「慶安御触書」で幕府も施肥を具体的に啓蒙しているが、農民の人糞尿は肥料価値としてはかなり低い物であった¹⁵⁾。そのため、下尿しもごえを都市部（特に武士階級の人糞尿）に求める農民の労苦があった。鰯漁の進展に伴い、干鰯が金肥として登場していた。しかし、下尿こそ、戦国時代からの最も安価な金肥であった¹⁶⁾。

幕府は年貢を米の物納だけではなく、銀納をも要求し、銀納を要求された農民は、銀を稼ぐために商品作物を盛んに栽培した。尼崎では、大坂（現在の大阪）の商人と結びついた綿花栽培が盛んになった

12) 1993年11月、兵庫県中学校社会科教育研究大会にて本授業を公開。

13) 楠本正康によれば、わが国では弥生時代から施肥が研究されていた。

楠本正康『こやしと便所の生活史』ドメス出版1981pp. 15-17

14) 前掲 楠本『こやしと便所の生活史』p. 31

15) スチュアート・ヘンリ『はばかりながら「トイレと文化」考』文春文庫1993pp. 240-242

16) 前掲 楠本『こやしと便所の生活史』p. 49同書は、ルイス・フロイス『日欧文化比較』を引用している。

なお、荒俣宏は、人糞が金肥として成立したのは鎌倉時代であるとしている。荒俣宏「厠、便所、トイレの起源とは」『日本トイレ博物誌』図書出版社1990p. 11

(この摂津地方の綿花栽培と大坂商人の財力が、後の阪神工業地帯の土台を形成する)。しかし、綿花栽培は、稲作よりも施肥効果の高い肥料を要求した。下尿よりも施肥効果の高い干鰯や油粕に頼る農業方法の普及は、農村に貨幣経済が深く浸透することを意味した。

そして、厳しい年貢の取り立てと貨幣経済の浸透は、農村の貧富の差を拡大する結果をもたらした。

(3) 教材の選択

教育目標に確実に子どもが接近するために、教材が用意されなければならない。

さて、「江戸時代の農民の生活」に関する授業実践では、翻訳された「慶安御触書」(1649年)の一部のみを教材として利用し、他に教材として新田開発や農具の改良を利用することが多い¹⁷⁾。翻訳された「慶安御触書」や「五人組帳」を主教材とした実践も数多く存在する¹⁸⁾。しかし、その教材構成では、江戸時代の農民の生活と幕府の農民政策との関連を、本校の生徒たちが情感をもって学ぶことも、生活の中に生きている歴史(江戸時代)に生徒が気づくことも困難であろう。

「江戸時代の農民の生活」を取り上げるのは、江戸時代という歴史的時代の庶民生活が、庶民個々人の能力や生活力によってのみ存在したのではなく、生活が社会構造の中で存在し、経済的な仕組みの中で営まれていたということを理解し、今日の社会システムの中での自分たちの生活を歴史的に理解するための基本的な学力を形成することにある。とすれば、新田開発や農具の改良を教材として取り上げた場合、そのような教育目標とはかなりの距離がある。庶民生活のたくましさや、その発展に歴史的な背景があることを理解させるのには、それらの教材構成でも可能であろう。しかし、庶民生活と社会構造・社会経済の関連を直接的にアプローチするには、困難が予想されるからである。

幕府の農民政策は、「慶安御触書」や「五人組帳」などに端的に表現されており、それらは、教材としての価値は高い。しかし、現代語に翻訳したそれらでは、教材としての価値は半減するであろう(読めない古文だから興味を引き起こすのである)。当時の農民もまた読めなかったのである¹⁹⁾。

一方、都市部にある本校の校区には農地はほとんどなく、生徒たちは現在の農業方法も知らないし、鍬や鋤の使用方法是らわかわからない。江戸時代の言葉も、農作業も知らない生徒たちにとって、「慶安御触書」や「五人組帳」は非常に難解であるため、直接的に教材として扱うのは困難であろう。しかしながら、疑問を持つことから始まり、真実に迫る学習の「楽しさ」や「驚き」を体験させるために、翻訳された教材を使用せず、生徒たちの生活体験を通して、可能な限り「ほんもの」に直面させたい。

17) 歴教協編『社会科中学歴史の授業』あゆみ出版1981p. 110

山下國幸・平間千可良編著『中学校社会科のカギ』岩崎書店1984p. 120

安井俊夫『歴史の授業108時間上』地歴社1990pp. 170-173

18) 原忠彦『中学校の歴史教育』地歴社1979pp. 110-111

笠島清治「身分制度と農民の統制」佐藤照雄編『中学校社会科指導細案歴史的分野』明治図書1981pp. 103-105

野崎純一「郷土史料の活用重点をおいた授業と教科書の活用—江戸時代の「農民の生活」を中心に—」

星村平和編著『歴史教科書を活用したわかる授業の創造』明治図書1984pp. 113-122

19) さらに、「古文」は国語で扱っている。他教科で鍛えられた学力を活用する意味でも、あるいは他教科での学習意欲を形成するためにも、原文の方がはるかに効果が期待できる。

(A) 読みとる実物教材としての郷土史料

① 「慶安御触書」(1649年)

幕府の農民支配の思想・政策を読みとるための基本となる教材である。現代語訳されたものではなく、可能な限り「現物」に近いものを教材として触れさせたい。そのために、写真で毛筆(木版)のもの²⁰⁾を示しながら、全文を読ませる。子どもたちの学力では、この「現物」は、まず読みとれない。江戸時代の一般的な農民以上の学力を有する子どもたちでさえ読めないことが、この「触書」を「感覚教材」として機能させることになるであろう。すなわち、「触れ」は文書による法規範ではなく、口頭によるものであったことを「感じとらせる」ことが可能となるであろう。

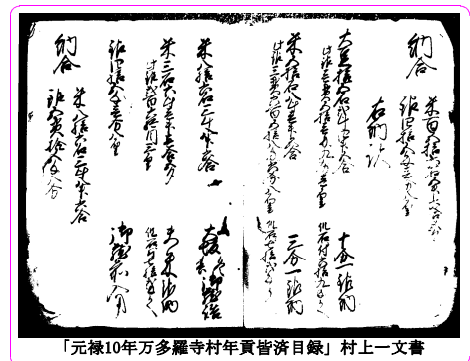
② 万多羅寺村

万多羅寺村は、校区の一部を含む江戸時代の村である。幕府直轄の天領であった万多羅寺村は、明治以後、三菱電機株式会社の工場用地となっており、村名を今日に残さない歴史上の村である。

③ 「元禄10年万多羅寺村 年貢皆済目録」・「万多羅寺村 差出し帳」

「年貢皆済目録」から年貢の内訳を読みとることができる。また「差出し帳」は、田畑の面積の内訳を示しており、年貢徴収の実態が推理可能になる。

なお、銀納分の米を銀に換算する必要があるが、これについては予め換算した結果を示した方が煩雑さがなくなる(概ね幕府の示した「三分一値段」は大坂の米相場に対応している²¹⁾)。



④ 「元禄14年万多羅寺村 村明細帳」

元禄時代の万多羅寺村で栽培されていた稲・麦の品種の他、作物を具体的に読みとることができる史料である。

⑤ 「五人組帳前書き」

村の「掟」が明文化されており、切支丹禁制他、幕府の諸法度が「村の掟」として効力を有していたことを知ることができる。また、最後の連署・押印を見るだけで「五人組」の姿が想像できる²²⁾。

(B) 感覚(実物)教材としての「雑炊」

江戸時代の農民の食べた雑炊を「ことば」で紹介し、教材として利用しても子どもたちには実感がわかなかったという実践が報告されている²³⁾。しかし、稗や粟の実物さえ知らない子どもたちに、稗や粟の雑炊を想像させても実感がわかないのは、むしろ当然であろう。「味」という「感覚」であれば、どの子にも判断可能な尺度ではないだろうか。そこで、思い切って、授業の中で稗と粟の雑炊を試食させ

20) 「慶安御触書」の木版による印刷物は、奈良本辰也監修・太陽コレクション『土農工商農民』平凡社1979p. 12や、高橋敏『見る・読む・わかる日本の歴史3 近世』朝日新聞社1992p. 71などにカラー写真で紹介されている。

21) 山崎隆三『近世物価史研究』塙書房1983pp. 55-56

22) 後掲 資料「万多羅寺村五人組帳」を参照。

23) 井口克典「農民・町人の支配」佐藤照雄・小俣盛男編『社会科歴史的分野の達成度評価』明治図書1983pp. 78-82

る計画を立てた。

享保のころの田中丘隅^{きゅうぐ}によれば、江戸付近の百姓の食生活は次のようなものであった。「田方^{たかた}に生きる百姓は、雑炊^{ぞうすい}にしても米を喰^{くら}ふ事^{こと}あれども、山方・野方に生まれては正月三ケ日といへども、米を口に入る事なき所多し。粟・稗・麦など食に炊くととも、菜・蕪^{あわ}・干葉^{ひえ}・芋^たの葉・豆さげの葉、その外あらゆる草木の葉^{かて}を糧として、穀物の色は見へぬばかりにして、而も朝夕飽く程の事なく、漸^{しか}く日の中一度宛^{ずつ}ならでは是^{これ}を喰^よふ事なく、餘^よは前に言^かふ粥^{かゆ}の類にて日を送る。

朝夕の膳^{ぜん}などに坐^{すわ}ると言^かふ事もなく、少し物をたべれば蟹^{かに}の泡^{あわ}の如くなり、茶をいくらか汲^くみ飲んで足りるとす。斯く恐ろしき物を食として、而も明七ツより起て骨を折り、夜九ツまで働きて縄^{なわ}をなひ、草鞋^{わらじ}を造る。其^{その}辛苦^{しんく}常ならずば、一日も其内に住む者あらんや。都に育ちては今様^{はな}の咄^{はな}しだに、一生耳に聞く事なき人は誠とも思はじ。都人にかかる食物をあしらへば、鉄丸^{てつがん}を食^くはすと言^{ども}へ共、一口も喉^{のど}には入らじ。」²⁴⁾農民は正月でも米を食べることはなく、穀物の色もわからない程に、あらゆる草木の葉を入れて炊いた雑飯^{まぜめし}・粥などを食べ、お茶を飲んで腹をふくらませていた。これが当時の農民の食生活の実態であったのである。

(C) 感覚教材としての「うんち」

「慶安御触書」の中で触れられている「せっちん」を教材にして、有田和正は小学生に「江戸時代の農民の暮らし」を指導している²⁵⁾。しかし、その実践では「便所の構造」にこだわりすぎて、「農民の暮らしの工夫」のみが強調される展開になってしまっている。むしろ、「せっちん」を契機に、農業生産の向上を狙った幕府の啓蒙政策に、子どもたちの視点が発展しなければならないであろう。

筆者は、さらに農民の「うんち」の肥料としての効果を取り上げたい。なぜなら、粗食しか食べなかった農民の「うんち」は、肥料効果を取り上げた場合、良質とは言えなかったのである。そのために、農民は豊かな食事をしてきた社会階級の「うんち」を買ったのである²⁶⁾。城下町へ「うんち」を買いに出かける農民の姿²⁷⁾を通して、社会階層を捉えさせることができる。そして、農民の労苦と金肥という概念を具体的に理解させる教材として、「うんち」は機能するであろう。

Ⅲ 授業の展開

(1) 指導計画(全3時間)

指導計画は、全3時間構成とする。詳細は、学習指導過程。

第1時 … 年貢と農民の食生活(米は残ったのか)

第2時 … 農民の増産の努力と農業の発達(下尿から下尿+干鰯へ)

第3時 … 農村における貧富の差の拡大(貧農を直撃した年貢と貨幣経済)

24) 田中丘隅『民間省要』渡辺実『日本食生活史』吉川弘文館1984pp. 245-246より引用。なお、ふりがなは倉橋。

25) 有田和正「日本の歴史—江戸時代の農民の暮らし」『授業研究』No.283明治図書1985p. 12

26) 前掲 スチュアート・ヘンリ『はばかりながら「トイレと文化」考』pp. 240-242

27) 尼崎市『尼崎市史』第2巻1968p. 572

(2) 学習指導過程(全3時間)

観 点	教育目標・到達目標 (評価基準)	教 材 (発問・指示を含む)	概念的知識 (キー・ワード)	生徒の学習活動
(第1時) 学習の動機付け 資料活用技能 思考・判断 次時への準備	授業の初めに ◎到達目標 (江戸幕府の農民政 策と農民の生活の 関連を理解する) を明示する。 ◎郷土の史料から、 年貢の重さを推測 することができる。	◎当時の農民が食べた雑炊(事前に炊く)。 Q雑炊の中身を「慶安御触書」から探して見よう。 ◎ほぼ原文のままの全文を配布。 ◎参考として『徳川實記』の原文を配布。 ◎稗・粟の実物 ◎万多羅寺村の地図 ◎「万多羅寺村年貢皆済目録」 1698(元禄11)年 ◎「万多羅寺村差出し帳」 1701(元禄14)年 ◎「万多羅寺村明細帳」 1745(延享2)年 Q村の耕地が全部、水田だったのか。畑で米は取れたのか。 Q村高ではなく、水田で取れた米の総量はいくらか。 ◎1合升と1合の米 Q粗食しか食べなかった農民のウンチはどんなものだったのだろうか。 ヒント:お尻を何でふいたか。 open-end。	雑炊 「慶安御触書」 (1649年) 麦・稗・粟・菜 (校区の隣の村) 天領 村請け 年貢・銀納 五公五民	◎到達目標を知る。 ◎当時の農民が食べた雑炊を食べてみる。 ◎雑炊を食べた感想を話し合う。 ◎「慶安御触書」から雑炊の中身を探す。 ◎大根・粟・稗を発見する。 ◎米を作っていた農民がなぜ、米を食べられなかったのか疑問となる。全部を年貢に取られたのだろうか。 ◎「年貢皆済目録」から本年貢負担率を計算する。 ↓ ◎村高は畑の収穫量まで米で見積もられたものであることに気づく。 ↓ ◎村人1人1日当たり、1.02合の米しか食べられなかったことに気づく。 ◎麦・稗・粟などの雑炊しか食べられなかった農民の生活と幕府の支配との関係を考える。 ◎粗食しか食べなかった農民のウンチを考えてみる。
(第2時) 知識・理解 資料活用技能	到達目標 (江戸時代の農民の 増産の努力と農業の 発達を説明できる) の明示。 ◎江戸時代に農業生産が伸びた原因として、新田開発と稲の品種改良や農具の発達及び施肥方法の普及があったことを説明でき	前時の復習 Q「年貢は、米以外に銀でも納めなければならなかった。」 「さて、米をできるだけ食べようとするれば、農民はどうしなければならないのだろうか。」 ◎教科書(日書)p.132 ◎「延享2年万多羅寺村明細帳」 (1745年) ◎「慶安御触書」の「せっちん」に関するところに注目させる。 Q前時の宿題「農民のウンチはどんなものものだったか」 ◎「寛延2年下坂部村明細帳」の下尿に関する所に注目させる。	新田開発 農具の改良 稲の品種改良 下尿(しもごえ) 金肥 (下坂部は校区)	◎米を食べるために、米を多く作る方法と、米以外に売れる農作物の(商品作物)栽培を考える。 ↓ 銀納によって商品作物を作る必要性があったことに気づく。 ◎「農民のウンチ」について話し合う。 ↓ ◎兎の糞に似たコロコロとしたものだったことを知る。

思考判断 次時への準備	る。 ◎商品作物の栽培が金肥を必要とし、貨幣経済が農村に深く浸透するようになったことを説明できる。 open-end。	Q「元禄14年万多羅寺村差出し帳」商品作物の栽培と金肥の使用は農村に何をもたらしたのか考えてみよう。 ◎宿題「元禄時代の第5代将軍綱吉は、江戸の城下町に野犬8万2000匹を飼っていた。1匹の犬に1日何合の米を食べさせていたのだろうか」調べておこう。	綿花栽培 商品作物 干鰯 貨幣経済の浸透	↓ ◎農民の「ウンチ」は低い肥料価値しかなかったことを知る。 ↓ ◎「うんち」を買うために農民たちが努力と苦勞をしたことを知る。 ◎貨幣経済の農村への深い浸透に気づく。 ↓ ◎貧富の差の拡大がおこることを知る。
(第3時)資料活用技能 知識・理解 知識・理解 思考・判断 関心	到達目標 (幕府の農民支配と農村の変化の関係を考える)の明示。 ◎年貢確保のために幕府のとった政策を説明できる。 ◎幕府の農民支配の原理に朱子学が働いていたことを説明できる。 ◎五人組制度のねらいを説明できる。 ◎村請けと機械的平等で負担した年貢の重さを説明できる。 ◎年貢と貨幣経済の浸透によって、貧富の差が拡大されたことに気づく。 open-endである。	前時までの復習 ◎「慶安御触書」 Q1.02合しか米を食べべられなかった農民が簡単に年貢を納めたのだろうか。 Q幕府が農民を支配するための手段として利用した思想を「触書」の中から探そう。 ◎触書の「名主組頭をハ真の親とおもふへき事」「親に能々孝行之心…」に注目させる。 ◎触書の「年貢さへ済すまし…」の所に注目。本当か考える。 ◎「元禄11年万多羅寺村五人組御仕置帳」(「前書き」は寺子屋の手本に利用された) Q機械的平等負担であった年貢負担。機械的平等負担が貧農に与えた影響は何か。 「宗旨人別帳」(略)(『尼崎の歴史』p.38を使用) ◎畦に植えられた大豆の写真(触書の名残)	朱子学「孝」 五人組村役人・名主・庄屋・組頭連帯責任 年貢の機械的平等負担 貧富の差の拡大 下人	◎「慶安御触書」を農民が読めたのか、考えてみる。 ↓ ◎文字を読めたもの(武士・村役人)が口頭で伝えたことに気づく。 ◎「触れ」の意味を知る。 ◎綱吉は、8万2000匹の野犬に1日1匹3合の米を与えたことを知る。 ◎気楽な生活と雑炊の差に疑問を感じる。 ↓ ◎朱子学の「孝」を強調する倫理に気づく。 ↓ ◎親への孝→名主・組頭への孝の仕組みの倫理が精神的に支配者への無批判な服従を強制したことを知る。 ◎機械的な平等による年貢負担が貧農に与えた影響を考える。 ◎下人にならなければならなかった人たちはどんな人たちであったかを考える。 ↓ ◎貧富の差の拡大に気づく。 ◎現代生活の中に残っている江戸時代を考える。

Ⅳ 授業の評価(教材が子どもたちに学ばせたもの)

(1) 授業評価の視点

授業の設計段階で設定した教育目標が、子どもたちの学力内容としてどのように実現されているか。これが授業評価の基本である。

本授業の場合、

- ① 江戸時代の農民の生活を、幕府の支配政策との関連で捉えることができるようになったか。
- ② 幕藩体制の経済的な行き詰まりの背景を捉えることができるようになったか。
- ③ 「資料活用技能」が高まったか否かが評価対象となる。
- ④ 今日の社会生活と江戸時代の歴史的なつながりを子どもたちはどのように捉えるようになったか(これは発展性の一面である)。

というような点を考察することで、具体的に授業評価できるであろう。

特に、資料活用技能と教材の関係を評価する際には、扱った史料が原文のままのものであり、非常に難解であったことが、どのように子どもたちの学力内容に反映するのか。それは、原文のままだから難解なのか。それとも、史料の内容そのものが難解なのか等の視点で分析することが必要であろう。

以上の視点から、定期考査での子どもたちの答案を参考資料として、授業ないし教材の効果を考察することにする。

なお、筆者の担当クラスは2クラス(1, 2組)であるが、同僚の中村徹教諭(国語)が、他2クラス(3, 4組)の社会科の授業を指導してくれた。中村教諭は、筆者の指導案と教材構成で指導した。そこで、標本数を増加させる意味も併せて、考察の対象資料として合計4クラスの生徒の答案を扱う。

(2) 基本性の学力と発展性の学力の実相

筆者が仮説として、学力に基本性のものと発展性のものに区分し、「意欲・関心・態度」を発展性の学力として位置づけているのは、前述の通りである(P.1参照)。

今回の授業後の総括的評価に現れた結果を見た場合(標本数が少数のため、度数分布の幅を2点刻みで取っている)、「関心態度」の得点が高いほど、ほぼ知識理解度や「社会的思考判断」の定着度は高いと言える(表①)。ただ、「知識・理解」の定着度を確認する問題の出題数が少ないことと、全体的に通過率が高いために強い相関とは読み切れない。「資料活用技能」についてもほぼ同様の傾向が見

「江戸時代の農民の生活」に関する成績集計①					
観点別 通過率(%)	知識理解	資料活用	思考判断	関心態度	人数(人)
	100	33.9	86.5	10～9点	9
	95.5	36.7	77.8	8～7点	15
	93.7	30.9	77.4	6～5点	34
	89.3	25.2	69.8	4～3点	28
	88.3	21.0	55.7	2～1点	20
全体平均	62.5	10.5	25.0	0点	24
	86.8%	24.4%	63.5%	4.13点	130人

上の表は、関心態度(作文)の得点域を軸に、他の領域の通過率を算出したものである。

なお、定期テストの「問題」の関連性から、知識理解・思考判断・関心態度は3学期中間考査の結果を、資料活用については2学期期末考査の結果を集約している。

(表 ①)

られるものの、一部でその相関関係が崩れる場面が見られる。この点については、評価問題の作成上の技術的な課題として理解したい。

「知識・理解」の定着度を確認する問題が少ないために、参考程度の意味しかなさないと考えられるが、表①と表②から、推定できるのは次のようになるだろうか。「関心・態度」に代表されるような「発展的な学力」を確認する問題で高得点を得ることのできる子どもは、「知識・理解」の得点が比較的高い。しかし、「知識・理解」の問題で高得点を取る子

「江戸時代の農民の生活」に関する成績集計②					
観点別	知識理解	資料活用	思考判断	関心態度	人数(人)
通過率(%)	6点	28.2	69.6	29.9	92
	5～4点	22.5	62.6	29.6	28
	3～2点	6.7	19.6	11.7	6
	1～0点	3.4	5.4	0.0	4
全体平均	5.21点	24.4%	63.5%	41.3%	130人

上の表は、知識理解の得点域を軸に、他の領域の通過率を算出したものである。

なお、定期テストの「問題」の関連性から、知識理解・思考判断・関心態度は3学期中間考査の結果を、資料活用については2学期期末考査の結果を集約している。

(表 ②)

どもが、「発展的な学力」を試される問題で高得点を取るとは限らない。その背景を考えるに、単に「記憶」するだけでも「知識・理解」に関する問題は解くことが可能であるが、「単純に記憶」するだけでは、「社会的思考・判断」や「関心・態度」の学力は高まらないということであろう。この点については、今後の実践で確認していきたい。

ちなみに、これらの傾向については、前年度の筆者の公民的分野での研究結果とほぼ同じものである。なお、前年度の研究結果では、「関心・態度」得点を軸にして集計した場合、「関心態度」の得点と「知識・理解」の得点についての相関係数はかなり高いものであった。

(3) 江戸時代の農民の生活を、幕府の支配政策との関連で捉えることができるようになったか

幕府の支配関係と農民生活の関連の「知識・理解」ないし「社会的思考・判断」の定着度を確認する、問題を単独で出題していないために、正確な通過率を見ることはできない。しかし、幕政改革との関連で「社会的思考・判断」を試した問題(P. 20参照)の通過率は、問題の難度から見てかなり高い(表 ①)。また、農具の改良などの「知識・理解」を確認する問題(P. 20参照)では、86%を超える通過率を示している。

「関心・態度」の評価問題として、2学期期末考査(授業後約1カ月経過時点)で「江戸時代の農民の食生活について、自分の意見」(P. 17参照)を書かせてみた。

なお、「食生活」としたのは、期末考査実施の段階で、江戸時代の学習が未完了のクラスがあったために、包括的に「農民の生活」と問う出題を見合わせたからである。

答案は6点満点として、採点基準は、以下の通りである。

- 「①江戸幕府の政策によって、農民の食生活が厳しいものになったこと。
- ②当時の生産力の低さによって、貧しさから逃れることができなかったこと。
- ③”雑炊”についての指摘があること。

以上の論点1つについての指摘につき、各2点とする。

ただし、自分の問題として、とらえていることが重要であり、自分の問題としてとらえている場合には、+2点とする。なお、論理矛盾についてのみ、減点法を採用し -2点とする。」

この採点基準での結果は、次の通りである。全受験者数130名で、平均2.74点(通過率45.7%)(なお、(表①)の「関心・態度」の通過率は、後掲の3学期中間考査のものである)。全体的に見て、“雑炊”についての「感想」を何かの形で表現している者が大半であるが、単なる「感想文」の場合は「1点」しか与えていない。要求しているのは、「感想」ではなく、江戸時代の農民が“雑炊”を食べざる

A. T

江戸時代の農民は、たくさんの米をつくったのに、ほとんど年貢にもっていかれて、自分で作った米を食べられないなんて、めちゃかわいそう。どうして、人を苦しめているものが一番えらい位なんだろう。だから次々に、苦しめられたものが、もつと苦しめることをするようになったんだ。自分がこの時代に生まれずによかったと思う。でも、こうして自分がいるということは、この時代に私の『せんぞ』が苦しい中にも生きてくれたから、今、ここに自分という人間がいるのであるから かんしゃしている。

本当にこの時代の政治はたまらん。こないだ、あわやひえを食べたけどまずかった。

を得なかった社会的な背景を意識しているかどうかであったからである。半数以上の者が、「感想」だけではなく当時の社会的背景、特に幕府の年貢徴収の厳しさとの因果関係を捉えており、それが「平均2.74点」という数値に表れていると言えよう。

ごく少数のサンプルである²⁸⁾が、以下に、具体的に答案を取り上げて考察することにする。

A. Tの答案(答案①)では、武士階級がいばり、米を生産していた農民だけが苦しんでいたことに憤りを表し

(答案①)

ている。「めちゃかわいそう」という表現には、彼女の精一杯の苦しみの感情が表れているが、農民を第三者的に捉えているとは理解しにくいものがある。文の途中に『せんぞ』に「かんしゃしている」という表現があるからである。彼女の答案からは、農民の貧しい食事が、武士階級の支配の結果であるという前提が読みとれる。さらに、彼女の理解はもっと深い部分に向けられている。それは、「くるしめられたものが、もつとくるしめることをする」という部分である。これは、虐げられた階級ほど、他の身分を虐げるという人間の悲しい性を指摘しており、「農」よりも下の階級とされた「えた・ひにん」の階級への厳しい差別を、農民自身がしたという歴史的事実を、

M. N

社会科でたべさしていただいたあのぞーすい。うちの口には、あわなかった。でも江戸時代の農民は、まずいなんてゆってる場合じゃなかっただろうな。だって、農民が必死でつくった米のほとんどが年貢としてとられていって、うちらみたいに、たべたい時にたべられへんかったし、なにかうのにも米でかっていたんだし、たべのお米なんてなかったんだろな。農民がどれだけはたらいても、たべられへんし、おさめる年貢の料もきまってるし、不作ってこともあんのに…。ばりかわいそう。たべれたときって、幸せかんじだろうな、と思う。いっしょうけんめいはたらいているのに自分で作った米がたべれないなんて、ぜったいに、いやだ。

でも、あの時たべたのより、もっともつとまずいねんから、そーとなまずさだろうな。やさいのかわりにタンポポとか、ざっそういれるなんて、やっぱまずそー。

彼女は理解しこのような形で表現していると評価できる。

M. Nの答案(答案②)は、彼女の人柄がそのまま現れている口語文である。誤字もあるが、農民の食生活と幕府の支配の関連が理解されていることが読みとれる。さらに、「米」が「金」として経済的(貨幣)な機能を果たしていたこともふ

(答案②)

まえている。「ばりかわいそう」(とてもか

28) 詳細は、後掲の資料「社会科通信なんでやねん」

わいそう)という表現は、A. Tと同様で、第三者的にだけ捉えているのではなく、「ぜったいに、いやだ」という展開で、農民と自己を同一視ないし同じ立場として捉えていることが読みとれる。

N. Uは、やや冷静な表現をしているが、農民の食生活と江戸時代の身分制そのものを「差別的」と意識している(答案③)。

T. Tの答案(答案④)は、ややくだけた調子の文章であるが、彼の人柄の現れと見てよいであろう。彼は、幕府の支配に対する憤りと、自分たちの祖先に対する尊敬の念を表現したかったのであろう。そこには、江戸時代の支配構造と歴史の中に息づいている自分の生活のを感じとろうとする意欲が感じられる。

S. Kの答案(答案⑤)は、年貢でだけでなく米が貨幣の代わりをしたために、農民の食生活が貧しいものになったことを指摘している。また、「うんち」が金肥であったことと、「うんち」の「あじみ」に強烈な印象を受けたのであろう。江戸時代の農民の労苦を具体的に想像していることを表現し、自分たちの祖先に対する畏敬の念を表している。

すべての子どもたちに、「表現力」をつけることはできていないが、60%以上の子どもたちは、ここに挙げた答案に近いもの(レベル的にやや落ちるものもあるが)を書いている。これらは、「雑炊」と「年貢皆済目録」、さらには「うんち」といった感覚(実物)教材の教材構成の効果であろう。

N. U

江戸時代の人は、白い米もろくに食べれず、社会の授業で食べたぞうすいのようなものばかり食べていたとは、知らなかった。ぼくは、米を少量しか食べれないのかと思っていたが、一口も米を食べれないことは、この時代の人は、毎日、悲しみにくしながら農業をしていたと思う。

家康も「農民は生かさぬよう、殺さぬよう」などどとえぐいことを言ったと書いてあるので大きな差別的なものを感じた。

(答案③)

T. T

とても貧しく、ひどいことだと思った。一日中働いていても、1日に1合の飯も食べることができないというのは、普通の人間であれば、「もう少しましにしないで」と感じるはず。しかし、悲しくも徳川幕府にそんな人情まるでなし。

「生かさず殺さず」なんて税のとり方はもう悪魔ですね。…と そんなバカげた税(年貢)のとりたてにもめげずに、せっせと米を作っては、自分ではあわかひえを食べる。なんとまあ一けんきよな人達でしょう。

食べることはとても貧しくひもじいけれど、この精神力はある。がんばった先祖の人々には、だつぼうものです。

(答案④)

S. K

江戸時代は、年貢をおさめないといけなくて、米が、ちょつとしかのこらない。しかし、残った米も、たべれない。今度、米を作るための、肥料を、買わなくてはいけない。金のかわりに米をさしだして、肥料を買う。その肥料が「うんち」。うんちなら、自分のうんちを肥料にしたらいいが、食べ物かゆたかではないので、買わなければいけない。しかも、うんちを「あじみ」するので、いまならかんがえられないことを江戸時代は、やっていた。それだけ、くろうしてきた江戸時代。それを、のりこえてきたぼくたちの祖先たちはすごいと思った。

(答案⑤)

(4) 幕藩体制の経済的な行き詰まりの背景をとらえることができるようになったか

この点については、「社会的思考・判断」を試した問題(P. 20参照)で学力状態を確認した。全体的には、ほぼ到達点に達しているといえよう(P. 10参照)。

さらに、授業実施後2カ月たった3学期の中間考査で、江戸時代の学習の総括的評価を試みるために、再び下記のような作文を書かせた。

課題「幕政改革は、百姓(庶民・農民)から見て「改革」といえるか。自分の考えをまとめなさい。」

採点基準は、10点満点とし、以下のように設定した。

- 「1 幕府の改革の事実を具体的に示していること(例 倭約令)。
- 2 支配階級にとっての改革であったことの指摘がある。
- 3 農業生産が高まっているにもかかわらず、一揆が増加したり、ききんが多発している事実を指摘していること。
- 4 百姓の生活のために保護政策を出したという反証をしている。(ただし、松平定信の「囲い米」は「生活を向上」させる「改革」ではなかったことに注意する必要がある。)
- 5 論理的に成立していること。
- 6 自分の態度を表明するような、自分の考えが示されていること。

以上の各論点について、各2点(ただし、2と4は両立しない)。なお、結論は、採点対象にしない。」

全体的に見て、表現力は高まっているが(全く書けない者が大幅に減少している)、授業の実施から若干日数が経過してためか、「通過率」は上昇していない。しかし、「年貢の厳しさ＝幕府の支配の厳しさ」という認識が、ほとんどの子どもたちに定着していると言える。

解答した子どもたちの90%以上が、結論的には「農民(庶民)にとっての改革ではなかった」として

いる。

江戸幕府の財政は「米」で成り立っていたために、どの改革も、年貢の増収が最大の課題であった。出資をおさえるために「倭約令」を出したと理解されているのは、支配階級の立場に立ったときの理解である。しかし、民衆(農民)に課された「倭約令」は、年貢の確実な徴収のためのものであった。このパラドックス的な構造に気づくのは、

かなり高度な理解をしていなければできないものである。J. Mの答案(答案⑥)では、その高度なこ

とが明確に展開されている。

また、S. Yの答案では(答案⑦)、改革の度に一揆が起きていることを指摘し、改革が農民のためであるなら、一揆が起きるはずはないと指摘している。この答案の場合、「倭約令」が農民にとってどのような意味を持っていたのか、「倭約令」が機能したのはどのような面なのかを明らかにしていない。しかし、J. Mの答案とは異なり、商人などの武士以外の豊かな階級に目を向けて、幕府財政の行き詰まりを意識している。

Y. Tの答案(答案⑧)は、江戸時代の暮らしについて、普段家庭で見ているテレビドラマでの印象と、

J. M

幕政改革は、百姓(庶民・農民)から見て「改革」とはいえない。幕政改革は、くずれてきた幕府の財政や政治を立て直すために行われたもので、農民のために行われたものではない。農民にも令が出されたりしたけど、その令は、農民から年貢を少しでも多く取り上げるためのもので、農民の生活は苦しく、少しも楽にはならなかった。幕政改革が行われて、農民の生活も少しはかわったかもしれないが、よくなったのではないので、「改革」とはいえないと思う。

(答案⑥)

S. Y

幕府はききんが続いているのに、百姓らを助けるのではなく、年貢をおさめさせるために、改革というものをした。これは百姓からみれば、ただでさえ苦しい生活をしているのに、改革のため、きびしい倭約をしと言われてたため、がまんにたえず百姓一揆などをおこした。これは百姓がかえって苦しくなった証だと思う。なぜなら、改革の時に、一番多く一揆などが多発しているからである。一揆だけではなく、打ちこわしというものもある。これらは改革のたびに商人らが米や商品を買িশめ、高い値で売ろうとするからである。このようなことから、幕政改革は、百姓から見て改革とは言えなかった。

(答案⑦)

学習した内容を比較している。彼女は、年貢の徴収を取り上げて改革の本質に迫ろうとしている。そして、改革の狙いは「商人、将軍ら」が富を得ようとしたことにありと指摘し結論に至っている。

また、M. Mは、改革という言葉の意味についての印象(理解)を明らかにした上で、幕府の改革を「改革」というイメージからずれると指摘する(答案⑨)。彼女にとっても、年貢の重さは強烈な印象があったようである。彼女は、授業中に「先生、今国会でやってる政治改革もひょっとしたら、あやしいんじゃない？」と、江戸幕府の改革から、今日の政治改革まで発展して教室に議論を巻き起こした(そのために授業は、1時間江戸時代から離れることになったが)。

いずれも、江戸幕府の改革が武士階級のためのものであり、庶民(農民)にとっての改革ではなかったと理解している²⁹⁾。表面的な学習だけで終わると、改革の内容と名称・中心人物などを覚えるのみであろう。しかし、具体的に年貢徴収の計算や「雑炊」を食べたことが、情感を伴いながら改革の本質に迫ろうとする、深い理解を求めようとする学力内容(関心・意欲)を芽生えさせたのであろう。

Y. T

改革という言葉は、すごくいい事をしているように思えた。テレビでも商人達は華やかに江戸での生活をしているようだ。けど苦しんでいたのは農民・庶民だと思う。

改革の度 年貢はふえてゆき、ききんがおそってくる。不作でも米は決められた量を持っていかれるのでは？こんなものでは改革というのはまったく百姓らにしてはひとつもいい事ではなかったと思う。改革というのは聞こえはいいけれど、内容は、ただ百姓らを苦しめ、商人、将軍らが富をえようとするひどい事だと思う。改革が行われる度、百姓らは苦しい思いをして働いていたんだろうと思う。そういう意味で改革とは全くよい事ではないと思う。

(答案⑧)

M. M

改革とはいえないと思う。幕府は政治改革とかいって ちょうしのいい事をいっているけど、自分たちのつごうにしかすぎないと思う。農民等にとっての改革ってゆうのは、少しでも多くの白いごはんをたべれて、少しでも年貢を下げてもらうっていうのが農民たちにとっての本当の改革だと思う。起用法の改革とかをいっばいしているけど、それは、幕府だけの改革だと思う。また農民にとってはただの年貢の引き上げ『だけ』にしかすぎない。

改革というのはその国全体をよくしようというもののなのに、全くよくならない。逆に一揆などがふえる一方。よけいに悪くなっている。それに改革らしい改革など全くないように思える。つごうにあわせた政治改革などなくてもいいと思う。こんな幕府なんていなくても百姓たちは自分でくらしをしようと思う。

(答案⑨)

(5) 資料活用技能は高まったか

資料活用技能を試す問題として、2学期の期末考査で、「万多羅寺村 年貢皆済目録」から年貢の割合・村に残った米を計算させた(P.17参照)。

この点については、ほとんどの子どもたちが正解にたどり着けなかった。原文のままだから、難解であったのではない。

むしろ「算数」のレベルでのつまづきであった。計算するには、単位換算をする必要があった。この点については、単位換算表を試験の際にも、問題文の中で示している。単位換算をする段階で、大半の子どもたちがつまづいていた。

29) 詳細は、後掲の資料「社会科通信なんでやねん」

さらに、百分率で年貢割合を出すよう求めたが、通過率が10%を超えなかった。

最も通過率が低かったのが、村に残った米の総量である。完全な正解を答えた者はいなかった。数式を論理的に導き出せた者が、全受験者130名の内、3名という有り様であった。ほとんどの子どもが、論理的につまづいたのは、「稲」を栽培するのは田であるということであった。年貢は、村単位でかけられ村請けになっていた。その石盛りは田畑・屋敷のすべての土地を対象にしていたのである。したがって、実際に取れた「米」は、田の面積分だけである（陸稲は栽培していない）。子どもたちは、この部分に全く気がつかなかったために、論理的な誤りをおかしていた。この結果は、単位を現在のものに

し、言葉も現代用語に変えた資料であっても同様であったであろう。子どもたちは、「稲」が「田」で栽培されるということを強く意識していないのであるから。

以上のような定着度であったため、回復のための手だてを取った(P.18参照)。

なお、他の資料の読みとりでは、通過率が60%を超える(3学期中間考査)³⁰⁾。



田の畦に植えられた大豆（1993年9月撮影）

(6) 現代生活を江戸時代との関連で捉えるようになったか

これまでに見てきた答案の中でも、今日の自分たちの生活と江戸時代の生活を比較し、今日の生活を見直そうという趣旨の子どもの意見は多かった。

「江戸時代の農民の生活」の授業のしめくりに、右上のような写真(カラーで)を数点見せて、「慶安御触書で強制された、畦に大豆や小豆を植える農法は、平成の現在でもしっかり引き継がれている。他に今日の社会で江戸時代の名残と思えるような風習などはないだろうか。自分たちで考えてください」と、江戸時代の習慣・風習は、今日にも確実に引き継がれているという話題で、学習の発展を期待した。特に、ここでは、今日にも残る部落差別問題の歴史性に気づかせたかったのである。

子どもたちは、敏感に反応した。授業の中

Y. A

士農工商について

江戸時代に入ると、身分制度がますますひどくなって、「士農工商」というものができてきた。でも、士農工商の下は、えた・ひにんなどの身分が置かれ、えた・ひにんの人はずごくひどい差別を受け、仕事は、人のいやがる死体の収集などそんな仕事ばかりをさせていた。結婚なども、自分の好きな人が自分より身分が下ならぜったいできなかった。結婚も同じ身分同士でなければならなかった。

私はこの士農工商について、1つ思ったことがあります。

「同じ人間なのに差別をするのか！」って思いました。この士農工商のせいでくるしめられた人がたくさんいます。今の世の中に、この士農工商があれば、好きな仕事もできなくなると思っています。この世の中にも士農工商ではないけど、似たような差別はたくさんあります。

私は士農工商のあった江戸時代に生まれなくてよかったです。なぜかという、もしも、えた・ひにんだったら、つらい思いをして一生生きていかなければならないからです。

(答案 ⑩)

30) 詳細は、後掲の資料「社会科通信なんでやねん」

で「部落差別や!」とか、朱子学の話から子どもたちの「先輩・後輩」の関係の世界や、現代の政治の税制度までに議論が発展した。その後の回復学習の課題作文でY. Aは授業の中で起こった議論をまとめている(答案⑩)。

2学期後の回復学習の課題作文の中で、Y. T(答案⑩)は、「米の自由化」問題と、1993年の東北地方の不作の問題を取り上げ、江戸時代の凶作と飢饉にオーバーラップさせて、今日の大衆行動(社会運動)を読みとろうとしている。そして、彼女は今日の大衆行動(社会運動)・表現行動を「一揆」の連続としてとらえようとしている。今後の彼女たちの公民的分野での学習が楽しみである。

Y. T

農民のおこした一揆について考える。

米がなくて、こまりはてた農民の選んだ手段が、みんなが1つに団結し武器をもってたたかう。という事だったのだろう。

最近、私達にも「米不足」と言う事が問題になっている。私は、まだ「米不足」と言う事態を把握してないが、細川内閣がアメリカから米を輸入する事をきめた。

その時点で米がどれだけ不足しているかがわかるはずだ。そして、その外米輸入をやめろ、と農家の人が団結してデモをしているのをニュースで見た。

その時私は、「これって、一揆みたいだ」と思った。昔とは立場がちがうけれど、先祖が昔やった事は、なんらかの形で今も行われているんだと思った。

先輩・後輩の関係、上の者をうやまえというのも昔からのものと授業では言ってたが、一揆も昔からなんでは…と思う。

(答案⑪)

(7) 今後の課題

前年度に、公民的分野で「現代家族」を授業設計して、「社会的事象への関心・態度」を高める授業に挑戦した。その際、資料活用技能を高めるための工夫の必要性を痛感した。その反省に基づいて、本授業設計があった。

しかし、資料活用技能を高めることは、非常にハードルの高い仕事であることを、再び痛感せざるを得なかった。「資料を如何に読み込ませるか」「如何に興味を資料にひきつけるか」という視点で設計したが、意外にも「算数」でつまづいたのである。子どもたちは「先生、数学やんか」という声を発した。論理レベルは「算数」であっても、子どもたちは普段見慣れない単位を見たときには、論理の組立ができなくなるようである。グラフや写真・図版の読解も他の領域の専門的な知識が必要になる。資料活用技能を高めるためには、周辺領域の学力状態(レディネス)を確認しておかなければならないであろう。

また、稲が田で栽培されているということも、都会育ちの子どもたちにとっては日常生活上の常識ではなく、専門的な知識になってしまっているようである。体験学習の必要性を感じる「時間」であった。今後さらに、資料活用技能を高めるための試論を練る必要性を強調して、本稿を閉じる。

以上。

※ 初稿は、尼崎市立小園中学校『研究紀要』1994年に所収。

※ 拙稿「中学校社会科歴史的分野『江戸時代の農民の生活』における『関心・意欲・態度』の評価に関する実践的考察」

A Practical Study as to Evaluation of "Interest, Willingness, Attitude" in "The Peasant Life of The Edo Era", in The History Class of Junior High School 『教育目標・評価学会紀要』第5号1995年所収は、本稿を元に寄稿したものである。

V 資料編

(1) 2学期期末考査 試験問題

◎問題 「万多羅寺村の残した史料をよく読んで、次の各問に答えなさい。」 (資料活用技能)

- ① 村高はいくらか。
- ② 本年貢は、いくらか。
- ③ 村高に対する本年貢の割合は何%になるか(小数第2位四捨五入)。
- ④ 村高に対する本年貢の割合を何とよんだか。漢字4文字で答えなさい。
- ⑤ 本年貢以外に、村が納めたものを全部あげなさい。項目だけでよい。
- ⑥ 銀45匁1分8厘を得るために、米を6斗5升売らなければならなかったとした場合、村に残った米は全部でいくらか(種^{たね}籾は、1反あたり7升まくものとする)。計算式を書いて、計算しなさい。
- ⑦ 残った米は、村人1人あたり、1日どれぐらいか。式を書いて計算しなさい。
- ⑧ なぜ、⑦の米も、農民は食べられなかったのか。理由を簡単に説明せよ。

◎ 史料解読のための参考 (単位換算)

田畑の面積の単位 1町 = 10反 = 100畝 = 3000歩(坪)
 穀物(容積)の単位 1石 = 10斗 = 100升 = 1000合
 通貨(金と銀) 金1両 = 銀50匁(元禄13年まで、以後60匁) = 銀4分
 重さの単位 1貫 = 1000匁(目) = 10000分

万多羅寺村 元禄十丑年御年貢皆済目録 (抄・改)

一 高301石2斗2升2合
 此取米152石4斗4升5合
 外ニ
 米3石6斗1升1合 夫米
 銀45匁1分8厘 御蔵前入用
 外ニ
 一 米4石5斗7升4合 御口米

元禄14年 万多羅寺村差出し帳 (抄・改)

田数合17町5反
 此分米246石3斗9升
 畑屋敷合5町6反
 此分米54石8斗3升2合
 田畑屋敷合23町1反
 此分米合301石2斗2升2合
 一 村高301石2斗2升2合
 一 当村百姓 耕作之間ニ、男ハ縄・箆、女ハ木綿認仕候
 一 家数合46軒 内 34軒 高持百姓 12軒 無高借や借地
 一 人数合237人 内 男122人 女115人

◎問題 「江戸時代の農民の食生活について、自分の考えを書きなさい。」(関心・態度)

(採点基準については、(P.10参照))

(2) 2学期期末考査の回復学習課題

(1) 次の文は、江戸時代の万多羅寺村の農民の生活についてまとめたものである。

文中の()内に、適語を入れて文を完成しなさい。

万多羅寺村は、今の園田地区の西はずれにあった村である。その領地には、ほんの少しであるが小園中学校の校区もふくまれていた。現在は(¹ 三菱電機)が、その跡地をほとんどすべて工場にしている所である。

さて、万多羅寺村が残している資料からわかる時代は、(² 元禄)時代であり、江戸幕府の将軍は、5代将軍(³ 綱吉)である。その当時の万多羅寺村は、幕府直轄の(⁴ 天領)であった。幕藩体制

元禄14年 万多羅寺村差出し帳 (抄・改)

田数合17町5反

此分米246石3斗9升

畑屋敷合5町6反

此分米54石8斗3升2合

田畑屋敷合23町1反

此分米合301石2斗2升2合

一 村高301石2斗2升2合

一 当村百姓 耕作之間二、男ハ縄・筵、女ハ木綿総仕候

一 家数合46軒 内 34軒 高持百姓 12軒 無高借や借地

一 人数合237人 内 男122人 女115人

を支えていたのは、農民が納める年貢であった。現在に残っている資料から、年貢の重さと万多羅寺村の農民の生活をさぐってみると、次のようなことがわかってくる。

年貢は、農民が個人で納めるものではなく、村全体で納める

かたちになっていて、これを(⁵ 村請け)という。万多羅寺村の面積は、約23町1反である。これは元禄14年の(⁶ 万多羅寺村差出し帳)からわかる。幕府の検地によって算出された村高は、米に換算して(⁷ 301石2斗2升2合)であった。

次に、万多羅寺村が納めた年貢を計算してみよう。

(⁸ 「元禄十年御年貢皆済目録」)によれば、村高301石2斗2升2合に対して、本年貢(本途物成)は(⁹ 152石4斗4升5合)である。年貢率は、(本年貢)÷(村高)×100 の計算式で求めることができる。年貢率は約(¹⁰ 50.6)%となり、(¹¹ 五公五民)とよばれる。

万多羅寺村 元禄十年御年貢皆済目録 (抄・改)

一 高301石2斗2升2合

此取米152石4斗4升5合

外ニ

米3石6斗1升1合

銀45匁 1分8厘

外ニ

一 米4石5斗7升4合

夫米

御蔵前入用

御口米

しかし、本年貢以外にも、農民は多くの米や(¹² 銀)を納めている。まず、(¹³ 夫米)がある。これは、戦さのあった時や、雑用、土木工事、宿駅の人夫に農民がかり出されていたものを、江戸時代になってから銀や米で代納させられた税である。次に、(¹⁴ 御蔵前入用)

として、幕府関係の蔵に運ぶ費用を取られた。さらに、税の徴収(取り立てのこと)に当たった代官所の費用まで、(¹⁵ 御口米)という名目で納めさせられているのである。

では、農民1人、1日当たりどのくらいの米が消費できたのか計算してみよう。米(稲)が作られていたのは、(¹⁶ 水田)であって、畑ではなかった。そうすると村の面積をすべて米(稲)ができたとし

て計算された、検地の結果(土地の作物の出来高を米に見積もることを石盛^{こくもり}という)を、そのまま利用して考えることはできない。石盛りの結果、はじきだされた村高には、畑だけではなく⁽¹⁷⁾ 屋敷)まで

◎ 史料解読のための参考 (単位換算)

田畑の面積の単位 1町 = 10反 = 100畝 = 3000歩(坪)

穀物(容積)の単位 1石 = 10斗 = 100升 = 1000合

通貨(金と銀) 金1両 = 銀50匁(元禄13年まで、以後60匁) = 銀4分

重さの単位 1貫 = 1000匁(目) = 10000分

含んでいるのである。これは「元禄14年万多羅寺村差出し帳」からわかることである。そうすると、水田で取られた米の量を見なければならないこと

になる。⁽¹⁸⁾ 「元禄14年万多羅寺村差出し帳」)によれば、水田の面積は、約17町5反であり、そこで収穫される米は⁽¹⁹⁾ 246石3斗9升)である。村全体で取れた米は、これだけであったのである。これが、計算の元になる米の量である。

したがって、年貢その他で納めた結果残った米を求める計算式は、

⁽¹⁹⁾ 246石3斗9升) - (本年貢) - (夫米) - (御蔵前入用) - (御口米) ということなる。仮に、銀45匁1分8厘を得るために、米を6斗5升売らなければならなかったとした場合、ここに残る米の総量は、⁽²⁰⁾ 85石1斗1升)である。

しかし、これが農民の生活のために消費できる米の総量ではなかった。翌年に稲を育てるために必要な⁽²¹⁾ 種粃)が必要なのである。⁽²¹⁾ 種粃)の量をこの残った米の総量から差し引かなければ、農民の消費できる米は計算上出てこない。別の資料から、⁽²¹⁾ 種粃)は、平均すると1反あたり7升まいたと推定できる。そうすると、水田の面積は約17町5反であるから、⁽²¹⁾ 種粃)の量は、⁽²²⁾ 175反×7升)で計算できる。

その計算の結果、⁽²¹⁾ 種粃)の総量は、⁽²³⁾ 12石2斗5升)となる。

こうして、⁽²⁰⁾ 85石1斗1升)から⁽²³⁾ 12石2斗5升)を差し引くと、72石8斗6升だけが、村全体で消費できる米の総量となる。「元禄14年万多羅寺村差出し帳」から、村人は全部で⁽²⁴⁾ 237)人である。したがって、農民1人、1日当たり消費できた米の量を求める計算式は、⁽²⁵⁾ 72石8斗6升÷237人÷365日)となる。

けっきょく農民1人1日あたり消費できる米は、⁽²⁶⁾ 0.8)合ということになるのである。

この計算結果は、かなりおおざっぱな計算によるものである(たとえば、畑の分の年貢として大豆を売って銀納する分も年貢明細には存在する。その大豆分を計算上差し引けば、残る米は1人1日あたり1.02合になる)。しかし、わずかに残された米も、農民たちは生活用品や農具・肥料その他を買うために、「金」の代わりに米を使用したので、ほとんど食べることはできなかったのである。

(2) 次に、君が授業で「江戸時代の農民の生活」を学ぶ前に、知っていた江戸時代、あるいは考えていた江戸時代の農民の生活をかんたんにまとめなさい。

(3) 次に、食生活だけではなく、江戸時代の農民の生活について、君の考えることを説明しなさい。

その際、農民の生活と、江戸幕府の支配との関係や、農民の生活について可能な限り調べて(授業で学んだことをまとめてもよい)、歴史的な事実を指摘して説明することが重要になります。たとえば、「慶安御触書」(1649年)や五人組制度、「ききん」との関係、奉公人、小作人や貧農の増加などの事実をとりあげて考えてみよう。

(3) 3学期中間考査 試験問題

◎問題 「次の文の()にあてはまる語句を、下から選んで答えなさい。」

(知識・理解 朝学習より)

江戸時代の経済の基礎は(①)の生産であったので、幕府や藩は、新田の開 発を盛んにおこない、耕地の面積は、18世紀には秀吉のころと比べて2倍に増 えた。また、(②)も改良され、備中ぐわや千歯こきによって生産は高まった。

さらに、綿・麻、茶、なたねなどの加工用の作物の栽培が広まった。都市では、(③)ができ、今日の銀行のような仕事も行われた。

[両替商 蔵屋敷 米 小麦 あい 干鰯 農具 油かす]

◎問題 「次の文は、江戸時代の江戸幕府の改革と社会の変化についてまとめたものである。文をよく読んで、各問に答えなさい。」

(社会的思考・判断)

江戸幕府の政治体制は、(ア)とよばれる。その(ア)を支えていたのは、百姓が納める(イ)であった。言い換えれば、(ア)は(ウ)を基盤に成立していたのである。当初は豊かであった幕府や藩の財政も、時代が進むにつれて、悪化していった。そこで、幕府は幕府財政の悪化を乗り切ろうとして、A「改革」で何度も、年貢徴収の強化及び年貢率の引き上げを試みたのである。

年貢率の引き上げを可能にしたのは、江戸時代に(エ)の増大があったからだとも言える。(エ)の増大は、幕府財政にとっても、百姓の生活にとっても、重要なことであった。そこに幕府が「(オ)」などで、施肥(田畑に肥料を使うこと)のための知識(草を刈ることや、せっちんを作ること)を広め、徹底しようとした理由がある。さらに、幕府だけでなく藩も(カ)の開発を行い、江戸時代に耕地は大きく増加した。

百姓たちの努力によって、(エ)は江戸時代にかなり増大した。Bしかし、度重なる年貢率の引き上げによって、百姓の生活は苦しいことが続いたと推定される。

一方、農業生産の増大とともに(キ)の栽培が盛んとなり、多くの商品も生産されるようになった。

商品は商人の手に渡り、やがて大商人が誕生するようになる。c大商人は農村に入り、多くの商品を生産することに成功して、富を形成するようになる。

農村を「商品」と「金」で支配した大商人は、次第に「金」の力で、武士・幕府に対抗するように成長していくのである。(ク)においては、「米」は(ケ)の一部にすぎないものであった。「米」を支配した幕府・武士と、「商品」「金」を支配した大商人の優劣は、ついに立場を逆転させていくのである。こうして、幕府は経済的に成り立つことが難しくなり、やがて崩壊していくのである。

- (1) 文中の()内に、次の語群から、適語を選んで文を完成しなさい。

語群					
商品作物	米経済	貨幣経済	幕藩体制	年貢	農業生産
慶安の御触書	公事方御定書	商品	新田	金	

- (2) 下線部Aについて、年貢率が高く、百姓は年貢を納めるのに苦勞した。年貢を納めることが、農村の社会にどのような変化をもたらしたのであろうか。次のうちから、あてはまるものを選び、記号で答えなさい。

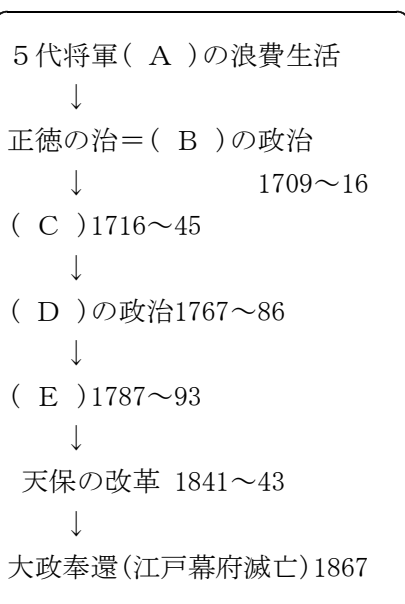
a 小作人が増えた b 地主が増えた c 小作人が減った d 変化はない

- (3) 下線部Bについて、なぜ、百姓の生活が苦しい状態が続いたと推測することができるのだろうか。次の語句をすべて使用して、説明しなさい。

[百姓一揆 改革 ききん]

- (4) 下線部Cについて、商人が農村に入って、農家に原料や道具を貸して織物などを生産させ、工賃を渡して製品を全部引き取る生産のしくみを何というか。

- (5) 次の図は、幕府の改革を順に示したものである。各問に答えなさい。



- ① Aの浪費生活は、幕府の財政の悪化の原因となった。Aの人物名を答えなさい。

また、Aの出した「生き物」を大切にせよという法律名を答えなさい。

- ② Bは、儒学者である。Bの人物名を答えよ。

- ③ Cは、8代将軍吉宗の行った改革である。

その改革を何というか。答えなさい。

- ④ Cの改革で、庶民の不満をやわらげるために設けられたものをなんというか。

- ⑤ Cの改革で、登用された、さつまいもの研究者は何という人物か。

- ⑥ Dの人物がついていた役職を何というか。

- ⑦ Eは、松平定信の行った改革である。改革名を答えなさい。

- ⑧ 株仲間の奨励をしたのは、だれか。人物名を答えなさい。

- ⑨ C, E, 天保の改革の、幕府の3改革で、共通してみられるのは、次のうちどれか。記号で答えなさい。

a 上げ米の制 b 囲い米の制 c 株仲間の解散 d 倭約令

- ◎問題 「幕政改革は、百姓(庶民・農民)から見て「改革」といえるか。自分の考えをまとめなさい。」
(関心・態度)

(採点基準については、(P.13参照))

(4) 授業ノート

(A) 江戸時代の農民の生活

◎ 「慶安御触書」(1649年)を読んでみよう

？ 君は読めたか → 江戸時代の農民は読めたのだろうか

？ 本当に農民は気楽(楽な生活)だったか。

？ 農民の生活と幕府の農民支配の仕方との関係を考えよう。

◎ 万多羅寺村(幕府の直領=⁽¹⁾ 天領)の納めた年貢を計算してみよう。

年貢を納める単位は、(⁽²⁾ 村)単位で、これを(⁽³⁾ 村請け)という。

村高 (⁽⁴⁾ 301石2斗2升2合)

本年貢 (⁽⁵⁾ 152石4斗4升5合)

村高に対して納める年貢の割合 … (⁽⁶⁾ 五公五民)

計算式 (⁽⁷⁾ 152石4斗4升5合 ÷ 301石2斗2升2合 ≒ 0.5)

本年貢以外に取り立てられた米・銀

(⁽⁸⁾ 夫米) … (⁽⁹⁾ 3石6斗1升1合5夕)

(⁽¹⁰⁾ 御蔵前入用) … (⁽¹¹⁾ 銀45匁1分8厘)

(⁽¹²⁾ 御口米) … (⁽¹³⁾ 4石5斗7升4合)

◎ ? どれくらい米は、農民に残ったのか。計算してみよう。

田の面積(⁽¹⁴⁾ 17町5反5畝2歩)→収穫量:米(⁽¹⁵⁾ 246石3斗9升)

畑の面積(⁽¹⁶⁾ 5町6反29歩)→収穫量:米に換算(⁽¹⁷⁾ 54石8斗3升2合)

①年貢他として取られた米の量

= 86石3斗8升6合 + 4石5斗7升4合

= 90石9斗6升

②銀納するために売った米の量 (1石=72匁で売れたと仮定して)

= 50石8斗1升5合 + 3石6斗1升1合5夕 + 6斗3升

= 約55石5升6合

③種粳として残さなければならない米の量

= 175反 × 7升 = 12石2斗5升

④農民の食米として残らない米の総量

= 90石9斗6升 + 55石5升6合 + 12石2斗5升

= 約158石2斗6升6合

⑤村に残る食米の総量 = 246石3斗9升 - 158石2斗6升6合

= 88石1斗2升4合

⑥村人1人当たり1日、平均でいくらの米を食べることができたのだろうか。

88石1斗2升4合 ÷ 237人 ÷ 365日 ≒ 1.02合

◎ 江戸時代の農民たちは何を食べて生きたのか。「慶安御触書」から探そう。

◎ 当時の雑炊を食べた感想をまとめよう。農民の生活と幕府の支配の関係に注意してまとめよう。

享保のころの田中丘隅^{きゅうぐ}は著書『民間省要』で、

「江戸付近の百姓の食生活について、次のように記している。

田方^{たかた}に生きる百姓は、雑炊^{ぞうすい}にしても米^{こめ}を喰^{くら}ふ事^{こと}あれども、山方・野方に生まれては正月三ケ日といへども、米を口に入る事なき所多し。粟^{あわ}・稗^{ひえ}・麦^{むぎ}など 食^たに炊^{かゆ}くとても、菜^{かぶ}・蕪^{ほし}・干葉^ば・芋^{いも}の葉^は・豆^{まめ}さげの葉^は、その外^{ほか}あらゆる草木^{そうぼく}の葉^はを糧^{かて}として、穀物^{こくぶつ}の色は見へぬばかりにして、而も朝夕飽^{しか}く程の事なく、漸^{ようや}く日の中一度宛^{ずつ}ならでは是^{これ}を喰^{くら}ふ事なく、餘^よは前^{まえ}に言^かふ粥^{かゆ}の類^{るい}にて日を送る。

朝夕の膳^{ぜん}などに坐^{すわ}ると言^いふ事もなく、少し物^{もの}をたべれば蟹^{かに}の泡^{あわ}の如^{ごと}くなり、茶^{ちや}をいくらも汲^くみ飲^のんで足^{たり}れりとす。斯^かく恐^{おそ}ろしき物^{もの}を食^たとして、而も明^{あけ}七ツより起^おて骨^{ほね}を折^をり、夜九ツまで働^{はたら}きて縄^{なわ}をなひ、草鞋^{わらじ}を造^{つく}る。其^{その}辛^{しん}苦^く常^{じょう}ならずば、一日も其内に住^すむ者^{もの}あらんや。都^{みやこ}に育^{はな}ちては今^{いま}様の咄^{はな}しだに、一生^{いっせい}耳^{みみ}に聞^きく事^{こと}もなき人^{ひと}は誠^{まこと}とも思^{おも}はじ。都人^{みやこびと}にかかる食物^{しょくぶつ}をあしらへば、鉄丸^{てつがん}を食^くはすと言^いへ共^{ども}、一口^{ひとくち}も喉^{のど}には入^いらじ。農民は正月でも米を食べることはなかった。穀物^{こくぶつ}の色のわからぬ程まで、あらゆる草木^{そうぼく}の葉^はを入れてたい^{まぜ}た雑飯^{ざふ}・粥^{かゆ}などを食^たべ、お茶^{ちや}を飲^のんで腹^{はら}をふくらませている様子^{ようす}をのべている。これが当時の農民の食生活の実態であったのである。」

渡辺 実『日本食生活史』吉川弘文館 pp. 245-246。(ふりがなは倉橋)

(B) 江戸時代の農民の生活 (その2)

① 銀納をせまられた農民たちは、できるだけ米を売らないようにするには、どうしなければならなかったか。

(¹ 施肥による増産)、(² 商品作物)・(³ 綿花)の栽培、
(⁴ 農具の改良)、(⁵ 稲の品種改良)

② 幕府(あるいは各藩の大名)が年貢を確保するためにとった増産方法は？

(⁶ 新田開発。
しかし、新田開発には限界があった。財源が必要であったし、領内に新田を開発する
余地(未開墾地)がなければできなかった。)

③ 金肥と商品作物の栽培が、何をもたらしたのだろうか。

最も安い(⁷ 金肥)…(⁸ 下尿)：城下町へくみ取りに
(⁹ 綿花栽培)→下尿よりも高い肥料効果のある(¹⁰ 干鰯)が必要



農村に(¹¹ 貨幣経済)の深い浸透

④ 幕府は、簡単に農民から年貢を取り立てることができたのだろうか？

農村に(¹² 名主)(庄屋)・(¹³ 組頭)・百姓代などの(¹⁴ 村役人)
(¹⁵ 五人組制度)で農民に(¹⁶ 連帯責任)を負わせる。
(¹⁷ 朱子学)の倫理を強制 … 「¹⁸ 孝 」による支配。

⑤ 年貢を機械的に平等に納めたことが、貧しい農民にとって不利に働いた。なぜか。考えてみよう。
(¹⁹ 年貢負担が同じ割合だと、貧農は米がなくなる。)

⑥ 『尼崎の歴史』p. 38から、万多羅寺村の下人の人数の変化を調べてみよう。

？ 万多羅寺村から下人が出るようになったのは、どのような原因が考えられるのか。考えてみよう。

(²⁰ 年貢の重さと貨幣経済の浸透によって没落する農民が出た。)

⑦ 江戸時代の生活の影響が、現代生活に残っているものはないか。

(²¹ 「慶安御触書」)(1649年)のまとめ
… 幕府の農民統制に関する法令をまとめたもの
特徴 (²² 朱子学)の倫理を強制している … 「²³ 孝 」による支配
(²⁴ 年貢)を確保するための幕府の農民政策が端的に現れている



農業生産の増産をねらい(²⁵ 農耕)の具体的方法まで示す
農民の生活が派手にならないように、

(²⁶ 食生活)や(²⁷ 衣生活)の細かいところまで規制



(²⁸ 厳しく苦しい)農民の生活

◎ 江戸市中の糞尿代

江戸時代の江戸の市中で、人糞尿を取り扱う仲買商人まで現れている(尼崎でも同様)。具体的な価格については、明らかにできるほど資料が発見されていないが、当時の江戸市中の総人糞尿代は、米や野菜類を含め、金額にして年間49000余両であった。

^{しもごえ}
下尿の等級

最上等品	勤番	(大名屋敷勤番者のもの)
上等品	辻肥	(市中公衆便所のもの)
中等品	町肥	(ふつう町家のもの)
下等品	タレコミ	(尿の多いもの)
最下等品		(囚獄、留置場のもの)

(以上、楠本正康『こやしと便所の生活史』ドメス出版pp.72-73より要約引用)

◎ コヤシ代と大阪周辺の農民

寛永11年(1634年)の大坂・西成郡江口村の書付によれば、尿尿代は1荷(4斗)=25文であった。

「大坂周辺の農家で、生産支出の5割以上がコヤシ代であり、そのコヤシ代の中で尿尿代は20～80パーセントを占めることが多い。」

(以上、本間 都「尿尿はどう扱われて来たか」『日本トイレ博物誌』図書出版社p.122より)

◎ 元禄期以降、大阪市中の^{しもごえ}下尿をくみ取りに出かけていた尼崎市域の村々

^{しどう} 椎堂	^{たのう} 田能	^{とうだ} 富田	^{あのう} 穴太	^{ほつかいじ} 法界寺	^{とのうち} 戸之内	^{しもけま} 下食満	田中	^{こなかじま} 小中島	^{なこうじ} 若王寺	^{ぜんぼうじ} 善法寺	^{ぬかた} 額田
高田	^{つぎや} 次屋	^{じょうこうじ} 常光寺	^{いまふく} 今福	^{しおえ} 潮江	^{ひがしながす} 東長洲	中長洲	^{ひがしなにわ} 東難波	西難波	^{たけや} 竹谷新田	^{はつしま} 初島新田	
^{おはま} 尾浜	^{くりやま} 栗山	大西	^{さんたんだ} 三反田	^{ななつまつ} 七ツ松	浜田	東新田	西新田	^{どい} 道意新田			

(下線部は、校区内の江戸時代の村)

(尼崎市『尼崎市史』第2巻 p.570)

◎ 享保のころの尼崎城下町の下尿代

「^{くそ}尿の問屋」が、民家に支払った^{しもごえ}下尿の代金

城下東町の7軒分(1年分) = 米3石

(尼崎市『尼崎市史』第2巻 p.572)

※※ ^{ふんにょう}糞尿の「こやし」としての利用法の歴史については、

スチュアート・ヘンリ著『はばかりながら「トイレと文化」考』文春文庫 1993.6.10 p.228～が、読みやすくおもしろい。 ※※